

キャンプ実習が高校生の自己肯定意識に及ぼす影響

山本 拓 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 黒澤 毅

キーワード：キャンプ実習，高校生，自己肯定意識

1. 緒言

青年期にあたる高校生は、自身の価値観の確立や自身を見つめ直すことにより、より確かな自己を確立しようとする。平石¹⁾は「自己肯定意識は青年期に発達する自己の1つである。」と述べており、また中学生や大学生と比べて低いと述べている。

一方、野外教育の目的は個人と1)地球・自然環境との関わり、2)周囲の出来事(他存在)との関わり、3)その人自身(自己：自分自身)との関わり、の3要素・観点についての気づきや認識の拡大・改善および創造的な行動を促進していくこと²⁾とされている。

そこで本研究では、キャンプ実習が高校生の自己肯定意識に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

【被験者】平成28年4月20日～4月22日(2泊3日)に実施された、S高等学校チャレンジキャンプに参加した高校3年生38名(以下、実習生)と各班カウンセラー5名(以下、カウンセラー)である。

【調査用紙】平石¹⁾が作成した自己肯定意識尺度を用いて、キャンプ前(pre)、キャンプ後(post)の計2回行った。

3. 結果及び考察

1) 実習生の自己肯定意識の変化をみるために、pre-postの平均及び標準偏差を算出し、対応のあるt検定を行った結果、0.1%水準で有意な差($t=-4.94$, $p<.001$)がみられた。また、領域別では対自己領域に0.1%水準で有意な差($t=-5.446$, $p<.001$)がみられた。更に班別の変化をみるために、各班の中央値を算出し、Wilcoxonの符号付順位検定を行った結果、4班と5班で有意な向上がみられた。普段の生活環境とはかけ離れた自然という非日常的な生活環境の中で、仲間と共に寝食を共にし、野外炊事や冒険要素を含んだプログラムを行う中で自己を見つめ直す機会があり自己肯定意識は向上したのではないかと考える。(表1)

表1 自己肯定意識の変化

	N	pre		post		t値
		M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	
自己肯定意識	38	132.92(10.83)	137.76(11.15)	-4.94	***	
対自己領域	38	80.76(9.35)	85.66(10.13)	-5.446	***	
対他者領域	38	52.16(7.86)	52.11(6.46)	0.6	n.s.	

*** $p<.001$ n.s.=有意差なし

2) カウンセラーの自己肯定意識の変化をみるために、pre-postにおける得点を単純集計し、変化を比較した。自己肯定意識が向上したカウンセラーは実習生への指導や関わりの中で実習生の成長を感じることができ、指導者として自信を持つことができるようになったのではないかと考える。また、自己肯定意識が低下したカウンセラーはキャンプ実習での指導を通して、自身の指導を見つめ直すことができ、評価をした結果、低下したと考える。

3) カウンセラーの自己肯定意識の変化が、実習生の自己肯定意識の変化に影響を及ぼすのかを検討するために、pre-postにおけるカウンセラーの自己肯定意識の変化と実習生の自己肯定意識の変化を単純集計し、比較した。しかし、カウンセラーの自己肯定意識の変化が実習生の自己肯定意識の変化に影響しているとは言い難い結果となった。それは実習生とカウンセラーとではキャンプで得られる効果に違いがあるからではないかと考える。実習生はキャンプ体験を通じての学びや成功体験が自己肯定意識の変化に影響されると考える。しかし、カウンセラーは技術や知識を学び、身に着けて実際の現場での指導経験を積むことにより、自身の成長を感じ、自信を持つことが自己肯定意識の変化に影響するのではないかと考える。

4. まとめ

本研究では以下のことが明らかとなった。

- 1) キャンプ実習前後において実習生の自己肯定意識は有意に向上した。領域別では対自己領域が有意に向上した。
- 2) キャンプ実習前後においてカウンセラーの自己肯定意識の変化には個人差があった。
- 3) カウンセラーの自己肯定意識が実習生の自己肯定意識に影響しているとは言い難い結果となった。

「引用・参考文献」

- 1) 平石賢二(1990):青年期における自己肯定意識の発達に関する研究(I)-自己肯定性次元と自己安定性次元の検討,名古屋大学教育学部紀要教育心理学学科37, pp. 217-234
- 2) 星野敏男,金子正監修(2011):自然体験活動研究会編,野外教育入門シリーズ第1巻,野外教育の理論と実際